

『正法眼蔵』における尽の思想(一)

栗谷良道

一

ここに題する「尽の思想」について述べる前に一言を付すと、道元の著書『正法眼蔵』における尽の思想に関する一連の研究として、これまでに、「正法眼蔵における究尽について」(曹洞宗宗学研究第二十八号、昭和六十一年)、「正法眼蔵における尽十方界」(印仏研究第三十五卷第一号、昭和六十一年)、『正法眼蔵』における大地観(統一特に尽大地について)『(曹洞宗研究紀要第二十号、昭和六十三年)』という論文を発表してきたことを述べておかねばならない。この一連の研究をとおし、一見してみると、道元は「究尽」と述べ、「尽十方界」と述べ、「尽大地」と述べ、「尽」という語に対して非常な関心を示していることに気付くのである。

この点に関し、更に述べると、道元は、また、著書『正法眼蔵』において、

(1)これを誦咒して尽大地を鎮護しきたる、尽十方界を鎮成しきた

る、尽時界を鎮現しきたる、尽仏界を鎮作しきたる、……(陀羅尼、道元禪師全集上・四二二頁)

(2)この現成は、尽地・尽界・尽時・尽法を量として現成するなり。(諸悪莫作、道元禪師全集上、二七八頁)

と述べており、「尽大地」、「尽十方界」、「尽時界」、「尽仏界」、「尽時」、「尽法」と述べている立場を指摘することができ、これらの箇所より、道元には、「尽の思想」として展開している立場のあることを予測することができるのである。

以下、道元の述べる尽の思想について論述してゆくこととする。なお、紙数の関係上、全文を掲載することができないため、回を分け、他所に分載することとする。

二

道元が、究尽を述べ、尽十方界を述べ、尽大地を述べ、尽を述べていることは前に述べたとおりであり、詳しくは前述のそれぞれの論文にゆずることとし、ここでは、道元の新た

なる尽への言及を論述することとする。

道元に「尽の思想」を述べる立場のあることは、前の論文「『正法眼蔵』における大地観（続）——特に尽大地について——」において提起した問題なのであるが、前の論文では、山河大地の肯定をより徹底した道元の立場として、「尽大地」という立場のあることを述べ、そして、尽大地の包容思想が、更に、「尽の思想」へと展開してゆくことを指摘したのである。すなわち、尽大地の包容思想の展開として、尽の思想のあることを述べたのである。そこで、この点より、尽について述べるならば、まず、「光明」の巻に、

あるとき、上堂示衆云、人人尽有光明在、看時不見暗昏昏、作麼生是諸人光明在。衆無對。自代云、僧堂・仏殿・厨庫・山門。

いま大師道の人人尽有光明在は、のちに出現すべしといはず、往世にありしといはず、傍觀の現成といはず。人人自有光明在と道取するを、あきらかに聞持すべきなり。百千の雲門をあつめて同參せしめ、一口同音に道取せしむるなり。人人尽有光明在は、雲門の自構にあらず、人人の光明みづから拈光為道なり。人人尽有光明とは、渾人自是光明在なり。光明といふは、人人なり。光明を拈得して、依報・正報とせり。光明尽有人人在なるべし、光明自是人人在なり。人人自有人人在なり、光明自有光光在なり。有尽有有有在なり、尽有有尽有在なり。しかあればしるべし、人人尽有の光明は、現成の人人なり、光光尽有の人人なり。（道

『正法眼蔵』における尽の思想（二）（粟 谷）

元禪師全集上・一一九頁）

とある箇所を指摘することができる。この箇所は「人人尽有光明在、看時不見暗昏昏、作麼生是諸人光明在」という一節に対する道元の解釈を述べた件りである。

ところで、道元がここに引用している一節に対する出典についてであるが、『圓悟仏果禪師語録』卷第十九には、

雲門示衆云。人人尽有光明在。看時不見暗昏昏。作麼生是光明。

衆無對。自代云。僧堂仏殿厨庫三門。（大正藏四七・八〇三上）

とあり、道元が、この『圓悟仏果禪師語録』より、雲門の語として引用したものと思われる。ところが、『雲門匡真禪師語録』巻中には、

或云。古人道。人人尽有光明在。看時不見暗昏昏。作麼生是光明。代云。厨庫三門。（大正藏四七・五六三中）

とあり、この『雲門匡真禪師語録』には、道元の引用している一節が「古人道」として述べられている。この点については、なお問題の残るところであるが、今は指摘のみにとどめておくこととする。

まず、道元の引用している「人人尽有光明在」という一節についてであるが、漢文の解釈に従えば、「人人、尽く光明の在る有り」という読み方になる。しかし、道元は決して書き下して読むことをしない。すなわち、「人人尽有光明在」は「人人尽有光明在」と読んでいたのである。そして、その

「人人尽有光明在」を述べて、「人人自有光明在」とも述べており、また、「渾人自是光明在」とも述べている。この箇所ので気付くことは、「人人尽有光明在」の「尽有」を「自有」と述べ、「自是」と述べている点である。そして、また、道元は「しかあればしるべし、人人尽有の光明は、現成の人人なり、光光尽有の人人なり。」と述べており、この点をも合わせ考えるならば、道元は、この箇所において、「尽有」という語に着眼していることが理解されるのである。

この「尽有」を述べる道元の立場は、更に、他所においても見いだすことができる。すなわち、「有時」の巻に、

(1) 正当恁歴時のみなるがゆえに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり、時時の時に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。(道元禪師全集上・一九〇頁)

(2) 要をとりていはく、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。(同・一九一頁)

とある箇所を指摘することができる。この箇所は「有時」について述べた箇所であるが、それぞれに尽有を述べていることが理解される。更に、この箇所では、「尽有尽界」と述べており、尽有と尽界とを並列して述べている。すなわち、尽有は尽界を意識した語であり、尽界の範囲で尽有を述べていると言うことができる。また、このことは尽有に尽界の意味

を含ませていると言うこともできる。このようなことは、前の論文(前述論文参照)に述べたように、尽大地、究竟についても言い得ることができる。すなわち、尽大地を述べて尽界と述べ、究竟を述べて尽界と述べていることに呼応している。このことより、尽有は、また、尽大地の意味をも含んでおり、究竟の意味をも含んでいるということが出来る。

このように、尽有が主張されるに至っても、尽界が並記されており、尽有には、尽界、尽大地、究竟の意味が含まれていると言うことができるのであるが、このことは、反面、尽の展開であると言うこともできるのである。このような尽の展開において、尽有が主張され、尽有として展開されていることには重要な意味があると言わねばならない。すなわち、有は現実の存在を表わしている語であるという点より、尽有の主張は容易に現実の肯定へと発展する可能性が秘められているからである。この点について、更に述べると、「行仏威儀」の巻に、

仏威儀の一隅を遣有するは、尽乾坤大地なり、尽生死去来なり。塵刹なり、蓮華なり。これ塵刹蓮華おのおの一隅なり。(道元禪師全集上・四八〇四九頁)

とあり、尽の展開を見いだすことができる。この箇所は仏威儀を述べた箇所であり、仏威儀を述べて、尽乾坤大地と述べると共に、尽生死去来と述べている。この箇所では生死去来

と述べており、有のより具体的な問題が示されているのである。ここに、尽是生死去来へと展開されているのである。

尽有より尽生死去来へと、尽の展開を述べる道元は、更に、「阿羅漢」の巻において、

諸漏已尽、無復煩惱、速得已利、尽諸有結、心得自在。これ大阿羅漢なり、学仏者の極果なり、第四果となづく。仏阿羅漢なり。諸漏は没柄破木杓なり。用未すでに多時なりといへども、已尽是木杓の渾身跳出なり。速得已利は、頂頼に出入するなり。尽諸有結は、尽十方界不曾藏なり。心得自在の形段、これを高処自高平、低処自低平と参究す。このゆえに、墻壁瓦礫あり。自在といふは、心也全機現なり。無復煩惱は、未生煩惱なり、煩惱被煩惱礙をいふ。(道元禪師全集上・三三三頁)

と述べるに至っている。この箇所は阿羅漢について述べている箇所であるが、ここに引用されている一節は、『妙法蓮華経』巻第一「序品」第一に、

如是我聞。一時仏住王舎城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已尽無復煩惱。速得已利尽諸有結。心得自在。(大正藏九・一下)

とあり、この箇所からの引用であると思われる。この『妙法蓮華経』の「尽諸有結」という箇所についてであるが、『妙法蓮華経』の原意では、「諸の有結を尽し……」を読むのが通例である。すなわち、道元は「尽諸有結」を書き下して読む

ことはせず、そのまま「尽諸有結」と読んでいる。また、道元が「尽諸有結は、尽十方界不曾藏なり。」と述べている点より考えるならば、「全ての有結」という意味に解釈しているということになる。このように、「尽諸有結」の原意を転化させている道元は、ここでもまた、尽諸有結と述べると共に、尽十方界を述べ、尽諸有結を尽十方界の範囲で述べている。ここに、尽の展開は諸有結へと至っているのである。

三

以上、尽の展開を述べてきたのであるが、前に究尽、尽十方界、尽大地と述べてきた尽の展開も、尽有、尽生死去来、尽諸有結へと展開するに至っている。尽十方界、尽大地が包容性を述べた語であることは前の論文で述べたことであるが、この包容思想も、尽有、尽生死去来、尽諸有結へと展開されるに至り、現実への肯定を求める立場のあることは動かすことのできない事実であると言わなければならない。

しかし、この尽の展開は、尽有、尽生死去来、尽諸有結にのみとどまっているのではなく、新たな尽の展開を見いだすことができるのである。この新たな尽の展開については、紙数の関係もあり、別の機会にゆずることとする。

△キーワード▽ 尽有、尽生死去来、尽諸有結

(曹洞宗宗学研究所員)